

コロラド留学便り 留学を通じて考えたこと

University of Colorado Anschutz Medical Campus
Department of Pediatric Hematology/Oncology/
Bone Marrow Transplant

大池 直樹
(新潟大学整形外科)

Colorado州のUniversity of Colorado Anschutz Medical Campusに留学する機会を頂き、2019年8月に留学を開始しました。大学院生であった2018年の8月に留学のお話を頂き、すぐに行きたいと手を挙げました。私の所属しているLabはPIのHayashi先生の元、ポスドクの私を入れても5人という小さなラボです。Hayashi先生は小児腫瘍科医（白血病と小児の肉腫）で、現在もラボの運営をしながら1/4の時間を臨床に当てています。Labの研究の柱は小児の代表的な肉腫である骨肉腫とEwing肉腫における転移メカニズムの解明と血液サンプルから早期の転移を検出するバイオマーカーの発見に関する基礎研究となっております。私自身は新潟大学から持ち込んだ細胞株に対してラボの技術を用いて研究を行なっています。他の人の研究のサポートをすることもあり、様々な経験を積むことが出来ています。

しかし、アメリカの生活に慣れてきたところで新型コロナウイルスのパンデミックが発生してしまいました。ラボが一時閉鎖されたり、一人しか行けなかったりと研究はかなり停滞してしまいました。私生活でもStay at home orderを経験したり、子どもの学校がonlineとなってしまうなど家族にとっても非常にストレスな生活を送ることになってしまいました。なぜ、限りある留学期間にこんなことが…と考える時もありましたが、その中でも実感出来たことがあります。一つ目は家族あつての仕事という思いが強くなりました。異国の地でほとんど外出できない環境を経験し、家族のメンタル面を一番に心配しました（妻と4人の子どもと留学中です）。PIのHayashi先生は家族がHappyで無ければどんないい研究をしても人生自体がHappyにならないと来た当初から仰っていましたが、アメリカに来てからもどうしても仕事を優先してしまっていました。この機会に家族が第一と心から思うようになりました。

二つ目は研究においても1人ではうまくいかないということを実感しました。普段会っていれば簡単に相談して5分で解決出来ることも1人で抱えてしまい、実験を重ねてもうまくいかない日々が続きました。また、実験がうまく行かない時のストレスも一人の時は強く感じました。同時に二人来られるようになって少し会話が出来ただけでストレスが少し軽減した気がします。同じ分野を研究する仲間を増やして行くことも研究成果を挙げるためには重

要ではないかと考えています。

現在、一番酷い状況と比べればかなり改善していますが、今後も新型コロナウイルスに悩まされる生活が続くと思います。周囲の状況は変えられませんが、置かれた状況で家族と研究がうまくいくように最大限頑張っていきたいと考えていきます。

住居を調べるまで Denver の家賃がこんなにも高いと知りませんでした。聞くところによるとこの 10 年で家賃は倍以上に上がったようで金銭的にはかなり厳しい状況でした。留学をご支援くださいました上原記念生命科学財団の皆様にこの場を借りて心より御礼申し上げます。